平城京東市跡推定地の調査X

第12次発掘調査概報

平 成 4 年

奈 良 市 教 育 委 員 会

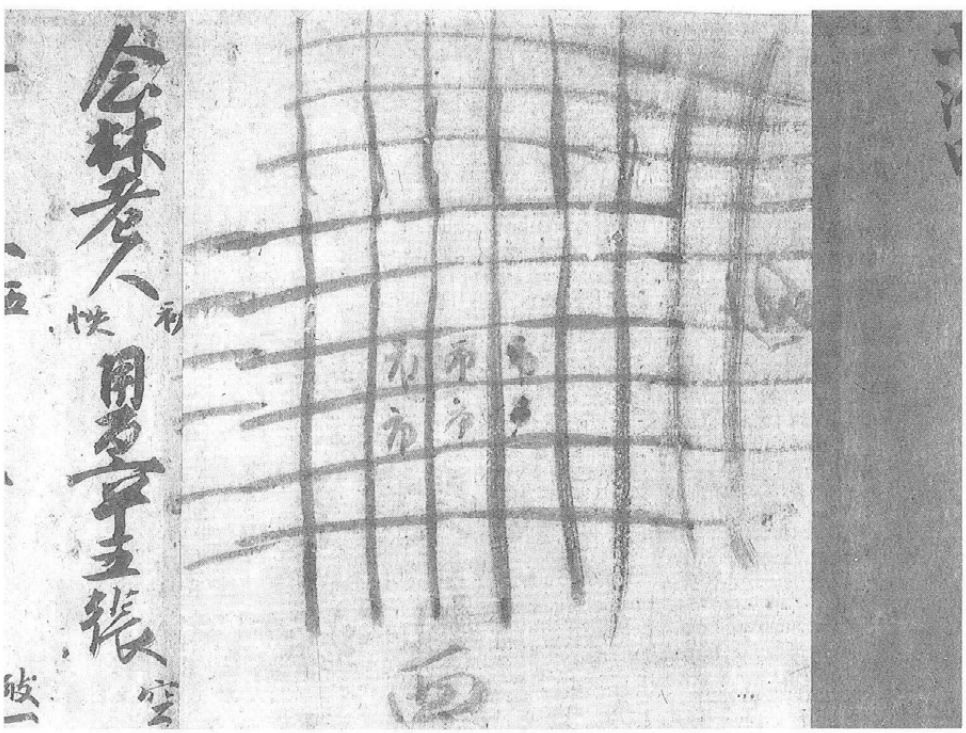


fig. 1　平城京市指図（浄土宗総本山知恩院所蔵『写経所紙筆授受日記』紙背）

序

全国の埋蔵文化財の発掘調査は、毎年盛んに行われており、その件数も莫大なものです。奈良市域においても発掘調査が頻繁に実施されておりますが、そのほとんどが開発事業に伴う事前の調査であり、記録のみの保存に終わっているのが実状です。調査が進む一方で貴重な遺跡が失われていくという二面性をもっているわけです。したがって、重要な遺跡については保全策を講じ、文化財を暮しにいかすまちづくりを推進していく必要があるといえます。

当教育委員会では、こうした考えのもとに、平城京の経済や流通の中心地ともいうべき東市跡推定地の継続調査を開始して以来10年が経過しました。この間、数多くの調査成果を得ることができました。今回の調査でも奈良時代の門や井戸等の遺構がみつかるなど新しい知見を得ています。このように綿密な調査をして、資料を積み重ねることが東市の所在解明につながると思います。

調査成果は本文中に詳述しております。御批判の余地もあろうかと存じますが、御鞭撻を乞うしだいです。

最後になりましたが、調査が無事終了し、多大の成果を収められましたのも、土地所有者である中野竹史氏をはじめ、地元農家組合の皆様方の御理解、御協力の賜と深く感謝しております。また、調査遂行にあたって御尽力いただいた奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会の皆様に御礼申しあげます。

平成4年3月

奈良市教育委員会

教育長　**久保田　正　一**

例　　言

1、本書は、平成3年度に実施した、平城京東市跡推定地（左京八条三坊六坪）の発掘調査の概要報告である。

1、調査次数、調査期間、面積および調査地番は下記のとおりである。

第12次調査　平成3年10月14日～11月22日　300㎡（杏町579番地の1）

1、調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化課（課長：小林謙一、センター所長：福本健司）が実施した。現地担当は三好美穂、庶務担当は蔵内康良、吉谷正宣である。

なお、調査補助員として奈良大学2回生安藤美保・渡辺典子が参加した。

1、調査にあたっては、土地所有者である中野竹史氏から御理解をいただいた。記して感謝いたします。

1、本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、浄土宗総本山知恩院から、写真、地図の提供をいただいた。記して感謝いたします。

1、本文中で使用した土器の器種名および調整手法は、奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告　XI」に準拠した。

1、本書の執筆は、Ⅲ-3を関野　豊が担当したほかは、すべて三好美穂が行い、編集も三好があたった。

目　　次

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　検出遺構の概要……3

Ⅲ　出土遺物の概要……6

1、土器類……6

2、墨書土器……8

3、木簡・木製品……9

Ⅳ　まとめ……16

Ⅰ　はじめに

昭和56年から開始した平城京東市跡の範囲確認調査も今年で11年目を迎え、調査次数も第12次となった。当初、市域推定地内での発掘調査例がなく、内部の様相がまったく判らない状態であったが、過去10年にわたる継続調査により数々の新知見を得ることができた。

第１～４次調査では、市域推定地内の北辺部を東西に通る農道の改良工事計画があったこともあり、東市跡に比定されている左京八条三坊五・六・十一・十二坪の４坪分のうち北辺部を中心に調査を行った。

第５・７次調査でも、市域推定地の東・西辺部の条坊遺構の検出を主眼において調査をすすめた。

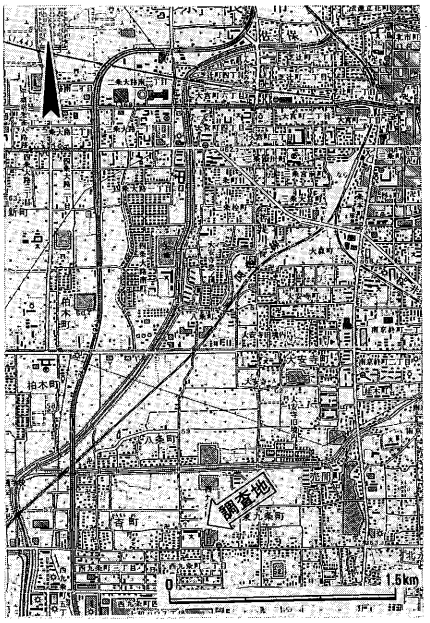


fig. 2　調査地の位置

これらの調査では、道路とその側溝、築地痕跡、築地に開く門を検出するなど、市域推定地の範囲をほぼ確定することができた。このほか、物資を運ぶためにも利用されたと考えられる東堀河とこれに架けられた木橋、隅櫓状の建物になると考えられる総柱建物や倉庫も検出することができた。

第６・８～10次調査では、周囲の条坊遺構の確認から市域推定地の内部の利用状況を把握することに目的を移した。その結果、十一・十二坪坪境小路や東三坊坊間路東側溝の検出、六坪の中央部付近には広い空き地が存在していることやその周囲には、敷地内を区画する塀や建物、倉庫があることが判った。

第11次調査では、市域推定地の北辺中央に開くと考えられていた門の想定地を調査した。ところが、門に関する遺構は全く存在せず、築地などの痕跡も検出できなかった。しかし、東三坊坊間路の西側溝を検出することができ、推定地内の中央を南北に坊間路が通っていることが明らかになった。第６次調査でも同東側溝を検出しているので、市域推定地内は道路でひと坪ごとに区画されていたと推定されるにいたった。

このように、これまでの調査により徐々に内部の様相や条坊遺構が明らかになってきた。しかし、市域推定地を東市と断言できる証拠は未だ得られていないのが現状である。

引続き綿密な調査を行い調査範囲を拡大していくだけでなく、発掘調査の成果と文献史料からの検討といった包括的な研究をすすめていく必要がある。

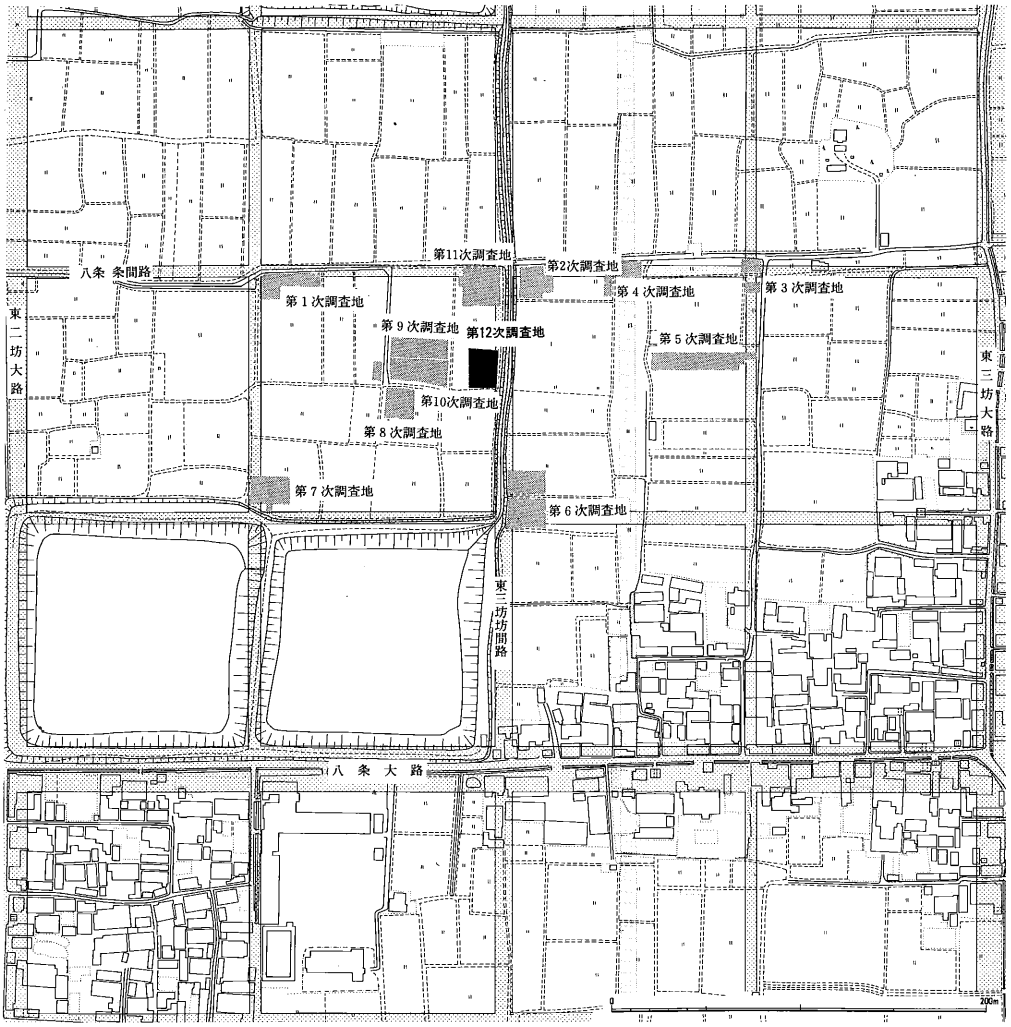


fig. 3　市域推定の条坊と調査地点位置図１／4000（奈良国立文化財研究所1963年作製１／1000「東市」使用）

以上の考えのもとに、今年度は第11次調査区の南方を引続き調査することになった。調査地は、平城京の条坊復原によると左京八条三坊六坪の東辺中央部付近に相当するところである。今回の調査は、第11次調査でも検出した東三坊坊間路と六坪の東辺中央に想定される門の確認を主目的とした。

調査は、東西15ｍ、南北20ｍ（発掘面積300㎡）の発掘区を設定し、平成３年10月14日に開始し、同年11月22日に現地での調査を終了した。

過去の調査成果は、奈良市教育委員会「平城京東市跡推定地の調査　Ⅰ～Ⅸ」1983～1991　を参照されたい。

Ⅱ　検出遺構の概要

層　序　調査地はすでに造成されており約0.2ｍの盛土がある。以下、水田耕作土、鉄分を少量含む淡灰褐色土、マンガンを含んだ暗褐色土と続き、現地表から約0.6ｍで明黄褐色粘土の地山に達する。発掘区北西隅から南東隅にかけては、地山の上に灰色細砂が堆積していた。地山上面の標高は、概ね56.0ｍである。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出遺構　検出した遺構には、道路、素掘溝、掘立柱建物、掘立柱塀、柱列、井戸、土坑がある。

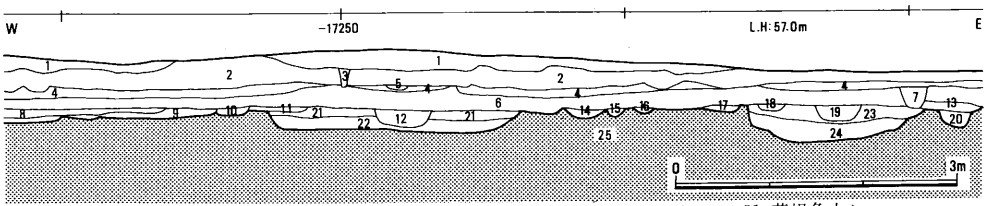
ＳＦ027　発掘区東端で検出した道路で、六坪と十一坪の間の東三坊坊間路である。西側溝も検出しているが、東側溝は発掘区外になる。路面幅2.8ｍまでを確認した。路面には舗装などの痕跡はみられない。

ＳＤ028　東三坊坊間路の西側溝。幅1.5～2.0ｍ、深さ0.2～0.4ｍの素掘溝である。溝内には上層に黄褐色土、下層に暗灰色粘砂が堆積し、奈良時代の瓦や土器が若干出土したが、いずれも小破片のため詳細な時期は不明である。

ＳＤ029　ＳＤ028の西側で検出した南北方向の素掘溝である。第11次調査区から続くものであり、今回その南端を検出することができた。幅2.6ｍ、深さ約0.2ｍを測る。上層の埋土は黄褐色土で、奈良時代前半の特徴をもつ土師器、須恵器を多量に包含していた。下層は黒灰色土が堆積する。

ＳＡ192　ＳＤ029と重複して検出した南北方向の掘立柱列。３間分を検出したが、北側は発掘区外へのびる。柱間は北から2.7－2.6－1.3ｍと不揃いで、柱掘形はいずれも一辺0.2ｍと小さい。これらは、築地構築時に堰板を留める添柱痕跡である。

ＳＡ193　ＳＥ200と重複して検出した東西方向の掘立柱塀。２間分を検出したが、西側は発掘区外へのびる。柱間は、東から2.6－3.0ｍである。重複関係からＳＥ200よりは新しいことが判る。



1.盛　土　　6.暗褐色土(マンガン含む)　11.茶灰色土　16.灰　色　土　21.黄褐色土 } ＳＤ029埋土
2.耕　土　　7.灰　色　土　　12.灰　色　土　17.灰　色　土　22.黒灰色土 }
3.茶褐色土　　8.茶褐色土　　13.明黄褐色土　18.灰　色　土　23.黄　褐　色　土 } ＳＤ028埋土
4.淡灰褐色土(多少量含む)　9.明黄褐色粘土　14.灰　色　土　19.灰　色　土　24.暗灰色粘砂 }
5.灰　色　砂　　10.暗灰色土　　15.灰　色　土　20.茶灰色土　25.明黄褐色粘土(地山)

fig. 4　発掘区北壁土層図　1／80

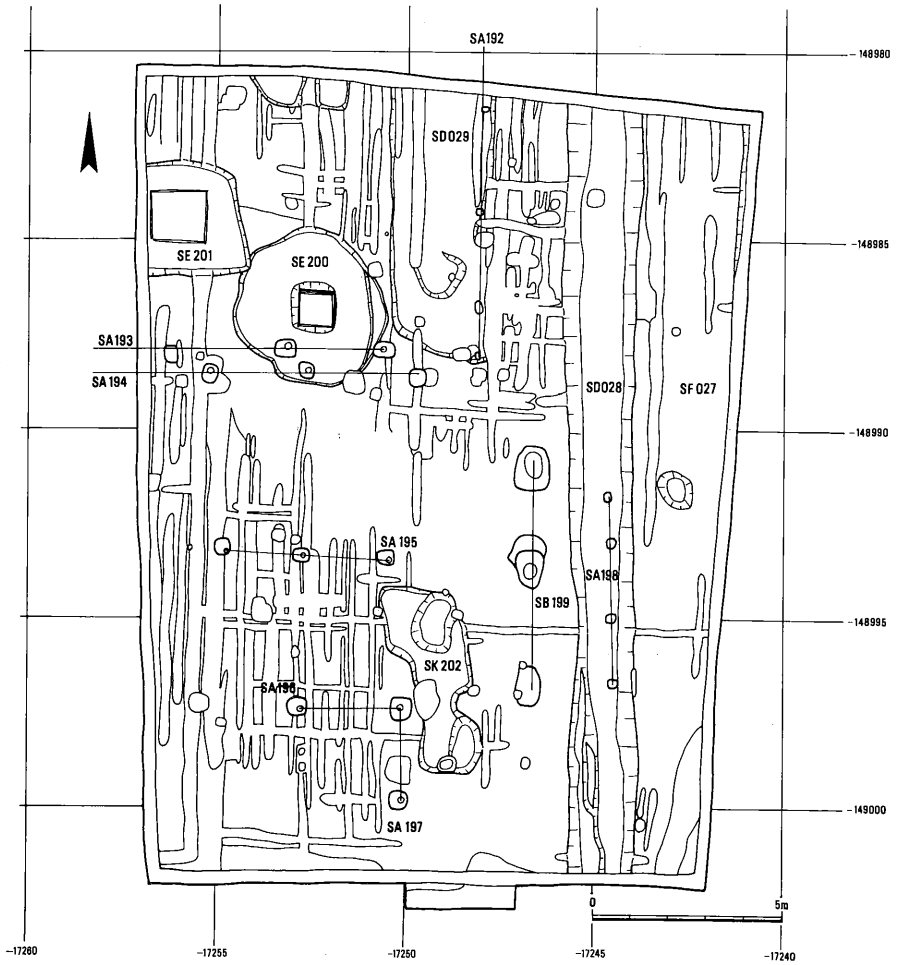


fig. 5　検出遺構平面図　1／200

ＳＡ194　ＳＡ193の南で検出した東西方向の掘立柱塀である。２間分を検出したが、西側は発掘区外へのびる。柱間は、東から3.0－2.6ｍである。重複関係からＳＥ200よりは新しいことが判る。第10次調査で検出した東西塀ＳＡ177の東延長線上にあり、これにつながる東西塀になる可能性がある。

ＳＡ195　発掘区中央付近で検出した２間分の掘立柱塀。柱間は、東から2.3－2.1ｍとなる。主軸が東で南に若干振れている。

ＳＡ196・197　発掘区南西隅で検出した鍵の手にまがる東西１間、南北１間の掘立柱塀。柱間は、ＳＡ196が2,7ｍ、ＳＡ197が2.5ｍとなる。柱掘形から土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

ＳＡ198　ＳＤ028と重複して検出した南北方向の掘立柱塀である。柱間は、北から1.2－2.0－1.8ｍと不揃いである。柱掘形の１つから瓦器片が出土した。重複関係からＳＤ028よりは新しいことが判る。

ＳＢ199　ＳＡ194とＳＡ196の間で検出した南北２間の掘立柱列で、門になると考えられる。柱間は、3.0ｍ等間。いずれも柱を抜き取った痕跡がみられる。柱掘形は、一辺0.3～0.6ｍ、深さは0.2ｍと浅い。

ＳＥ200　東西4.0ｍ、南北4.0ｍの平面楕円形の掘形をもつ井戸で、検出面からの深さ3.2ｍを測る。掘形は東壁に緩い段をつけて二段掘りされ内に井籠組井戸枠が据えられている。井籠組板材は長さ約100㎝、幅16～40㎝、厚さ２～５㎝で、目違柄で組まれた内法は一辺94㎝である。底から９段分が残っていた。

井戸枠内の埋土は、６層にわけることができる。上層から順に、第１層茶灰色砂質土、第２層淡灰色砂質土、第３層暗灰色粘砂、第４層灰色粘土、第５層灰色砂質土、第６層灰色粘土となる。第４・６層からは奈良時代後半の特徴をもつ土器類をはじめ、木簡・木製品などが多量に出土した。

ＳＥ201　ＳＥ200と重複して検出した東西2.6ｍ以上、南北3.0ｍの平面方形の掘形をもつ井戸で、検出面からの深さ1.3ｍを測る。内にはＳＥ200同様、目違柄で組まれた井籠組井戸枠を据えている。板材は、長さ150㎝、幅25㎝前後、厚さ２～５㎝。内法は、東西が140㎝、南北が130㎝である。下から３段分が残っていた。枠内から奈良時代末の特徴をもつ土器類や木製品が出土した。重複関係からＳＥ200よりは新しいことが判る。

ＳＫ202　ＳＤ028の西側で検出した東西1.0～2.0ｍ、南北4.8ｍの平面不整形の土坑。深さ約0.2ｍを測る。埋土から奈良時代中頃の土器が若干出土した。

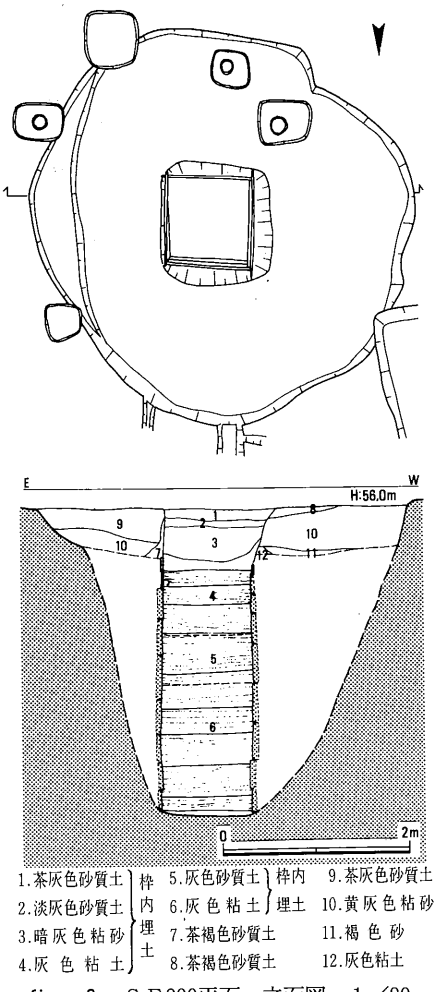


fig. 6　ＳＥ200平面・立面図　１／80

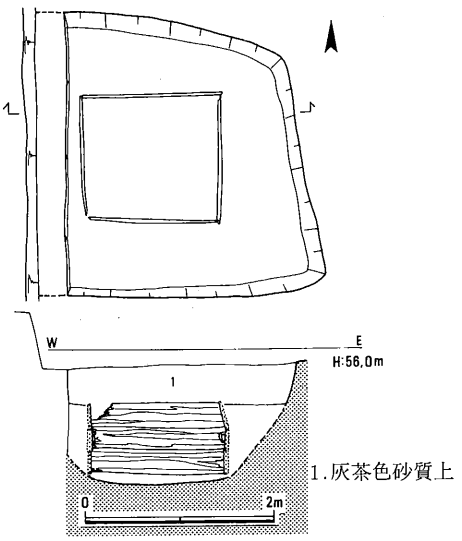


fig. 7　ＳＥ201平面・立面図　１／80

Ⅲ　出土遺物の概要

遺物は、遺構面を覆う暗褐色土、素掘り溝、柱穴、井戸、土坑から遺物整理箱で30箱分が出土した。奈良時代後半から末にかけてのものが多いが、前半のものも若干ある。以下、ＳＥ200から出土した遺物を中心に記す。

1、土器類

ＳＥ200出土土器　枠内埋土（第１～６層）から遺物整理箱で10箱分の土師器、須恵器が出土した。このうちのほとんどが、第４・６層からのものである。時期的には、奈良時代後半のものがほとんどであるが、奈良時代前半のものを若干混じえる。

土師器　杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ａ、椀Ａ、椀Ｃ、高杯、甕、製塩土器がある。

杯Ａ（１～６）は、口縁部だけを横なで、底部外面は未調整のままで放置するもの（１～３・５）と底部外面にも横なでを施すもの（６）、底部外面から口縁部外面中半までをへら削りおよびへら磨きを加えるもの（４）とがある。１～５の底部外面には、墨書がある。杯Ｂ（７）は、口縁部内外面を横なでしたのちへら磨きを、内面にはラセン状暗文、斜放射状暗文、連弧状暗文を施す。底部外面には墨書がある。皿Ａ（16・17）には、口縁部を強く横なでしたのち、外面全体を削るもの（16）と底部外面だけを削るものがある。椀Ａ（８～11）は、丸底に近い小さな平底と内彎しながら斜め上に大きく開く口縁部からなる。８・10・11は、外面をへら削りしたのちにへら磨きを施している。11の底部外面には墨書がある。椀Ｃ（12～15）は、丸底に近い平底と屈曲しながら外反する口縁部からなり、口縁部の上半ではほぼ垂直にたちあがり、端部近くで小さく外反する形態である。いずれも口縁部の横なで以下には成形時の凹凸をとどめ、粘土紐の痕跡を残す。12・13の底部外面には墨書がある。

須恵器　杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ｃ、平瓶、壺Ｌ、甕がある。

杯Ａ（18～21）は、口縁部内外面をロクロナデ、底部外面はヘラ切りののちナデを加えるもの（18～20）と底部外面を不定方向のヘラ削りで調整するものとがある。18・21の底部外面には、墨書がある。杯Ｂ（22～26）にも、底部外面をナデで仕上げるもの（22・24～26）とヘラ削りで調整するもの（23）とがある。22～24・26の底部外面には墨書がある。皿Ｃ（27）は、広く平坦な底部と斜め上に開く短い口縁部からなる。底部外面は、ヘラ切りのままで放置されている。平瓶（28）は、平底でへん平な体部の背面に広口の口縁部と逆Ｕ字形の把手を付すもので、高台は付かない。底部外面はヘラ切りのままであるが、それ以外はロクロナデで調整する。内面には、黒漆が薄く付着している。壺Ｌ（29）は、卵形の体部に外反する口縁部をつける。内外面ともにロクロナデで仕上げている。肩部分には、灰緑色の自然釉がかかる。

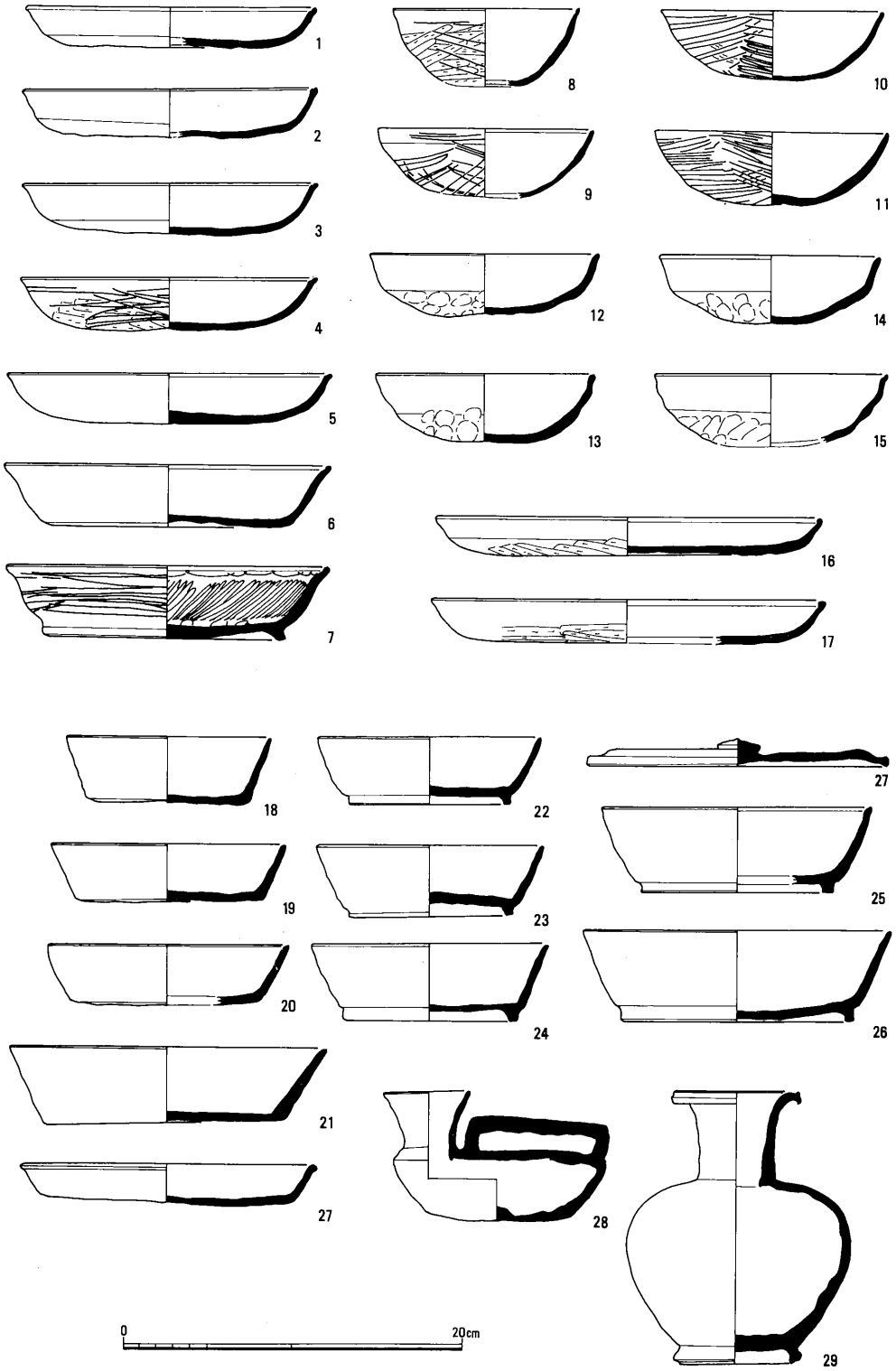


fig. 8　ＳＥ200出土土器　１／４

2、墨書土器

ＳＥ200から29点の墨書土器が出土した。その内訳は、「小」の字様のものが24点、「鯛」が２点、「八番」が１点、「袖」が１点、不明１点である。「小」の字様のものは、書体にばらつきがめだつ。記号になるのかもしれない。以下に、文字の遺存状態の良いものを選び出し図示した。なお、表の番号は、実測図及び写真と一致する。

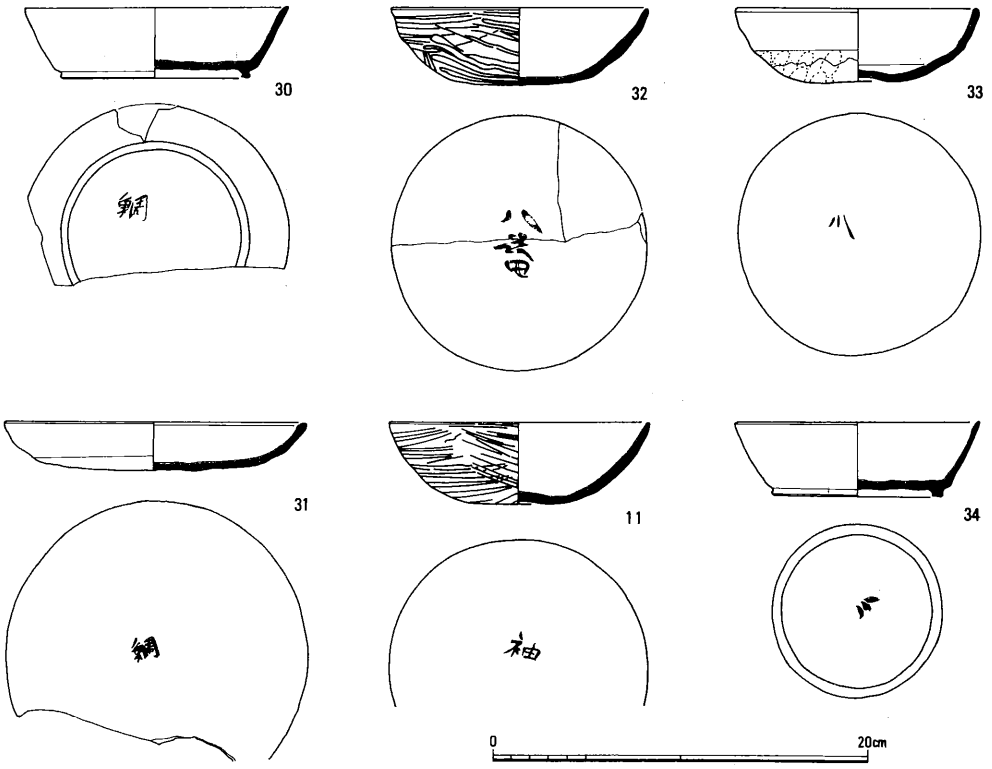


fig. 9　出土墨書土器

No.	記載内容	器　種		記載位置	出土遺構	No.	記載内容	器　種		記載位置	出土遺構
30	鯛	須恵器	杯Ｂ	底部外面	ＳＥ200	40	小ヵ	須恵器	杯又皿	底部外面	ＳＥ200
31	鯛	土師器	皿Ａ	〃	〃	41	小	〃	杯Ａ	〃	〃
32	八番	〃	椀Ａ	〃	〃	5	小	土師器	〃	〃	〃
11	袖	〃	〃	〃	〃	3	小	〃	〃	〃	〃
33	小	〃	椀Ｃ	〃	〃	42	小	〃	〃	〃	〃
34	小	須恵器	杯Ｂ	〃	〃	2	小	〃	〃	〃	〃
35	小	〃	〃	〃	〃	4	个	〃	〃	〃	〃
26	小	〃	〃	〃	〃	1	□	〃	〃	〃	〃
22	小	〃	〃	〃	〃	43	小	〃	皿Ａ	〃	〃
36	小ヵ□	〃	〃	〃	〃	7	小	〃	杯Ｂ	〃	〃
24	小ヵ	〃	〃	〃	〃	12	小	〃	椀Ｃ	〃	〃
21	小	〃	杯Ａ	〃	〃	6	小	〃	〃	〃	〃
37	小	〃	皿Ｃ	〃	〃	13	小	〃	〃	〃	〃
38	小	〃	杯又皿	〃	〃	18	□	須恵器	杯Ａ	〃	〃
39	小	〃	杯Ａ	〃	〃						

tab. 1　墨書土器一覧

3、木簡・木製品

木簡はＳＥ200第６層から５点、木製品はＳＥ200とＳＥ201から合計60点出土している。その内訳はＳＥ200第４層から漆器皿・斎串各１点、第５層から斎串２点、第６層から鎌柄・刀子・木履・有孔円盤各１点、用途不明品２点、曲物底板４点、斎串44点、ＳＥ201から横櫛・斎串各１点である。以下、これらについて概要を報告する。

木　簡　出土した５点のうち、３点（１～３）は習書木簡の削屑である。これらは筆跡や材質から同一木簡の削屑である可能性が高い。４・５も削屑である。文字の一部を残すのみなので、木簡の内容等は不明である。４の字数は４文字分確認できる。５の字数は５文字分と推定できる。

1　〔張張カ〕□□張張□　□　、、、□　〔浄カ〕　（95）×（16）×0.5　091＊

2　〔争カ〕浄浄浄浄□□　□　□頂□頂　（159）×（21）×0.5　091＊

3　□□頂頂□□□　（112）×（11）×0.5　091＊

4　□秦□□　（150）×（９）×1.5　091＊

5　□　（59）×（７）×0.5　091＊

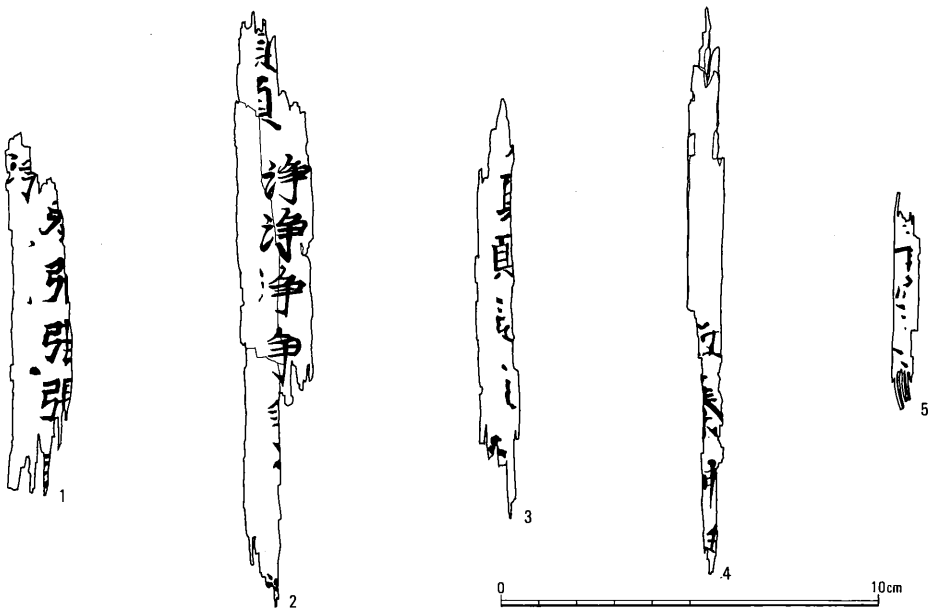


fig. 10　ＳＥ200出土木簡　１／２

木製品　漆器皿（１）は、土師器皿Ａを模倣し、横木取りで成形している。木地に直接黒漆を塗っており、口縁端部と外面は特に厚く丁寧に仕上げている。漆器は平城宮跡から出土したものが多いが、京内では大路側溝や東堀河の例を除くと、長屋王邸跡、阿弥陀浄土院跡や左京八条一坊三坪の池跡などがあげられる[1)]。口径16.5cm、器高2.5cm。

鎌柄（２）は、角材を用い、中央から柄元にかけては若干反り、徐々に太くなるようつくっている。中央から柄尻は角を面取する。柄尻に高さ1.2cmの山形の突起をもつ。残存長23.4cm、断面は中央で2.2cm×2.0cmの隅丸方形である。

刀子（３）には、鞘中に刀身が残っている。鞘全体が棟の方へわずかに反っている。鞘の中央が最も細く、両端に向かい若干太くなる。鞘尻と鞘口は一部を欠損する。全長19.1cm、断面は中央で長径1.9cm、短径1.3cmの楕円形である。

木履（４）は、底面に歯をつくり出さないものである。被甲の先縁に１条、中央に２条の刻線がある。木履は奈良時代の出土例が少なく、長屋王邸跡から２点[2)]、左京二条五坊北郊から１点出土している[3)]。

有孔円盤（６）は、中心に長径1.0cm、短径0.7cmの孔をもつ。両側から穿孔する。側面は斜めに成形する。片面は削りが極めて丁寧だが、もう片面は割り裂き面を残す。蓋板の可能性がある。直径6.0cm、厚さ0.6cm。

横櫛（８）は、背の肩部を丸くつくっている。歯の挽き出し位置は背に沿うように曲線を描く。歯数は３cmあたり32本で、奈良時代の概ね平均的な本数である。残存幅4.9cm、高さ2.5cm。厚さは背で0.5cm、歯の先端近くで0.2cm。刃長1.8cm。

斎串（９～21）は、すべて上端を圭頭状、下端を剣先状につくっている。９は上端斜辺と側面の角から切り込みを入れる。全長18.7cm、幅2.6cm、厚さ0.1cm。10は切り込みを上端近くの側面から入れる。全長17.9cm、幅2.4cm、厚さ0.1cm。11～16は上端斜辺から切り込みを入れるものである。11が復元長23.9cm、幅3.1cm、厚さ0.2cmで、16が全長16.7cm、幅2.3cm、厚さ0.2cm。17～20は側面の上端近くから切り込みを入れるものである。17が全長24.5cm、幅3.2cm、厚さ0.1cm、20が復元長20.0cm、幅2.4cm、厚さ0.2cmである。21は切り込みを上端斜辺から入れる。復元長18.2cm、幅2.6cm、厚さ0.3cm。９はＳＥ200の第４層から、10は第５層から、11～20は第６層から、21はＳＥ201から出土した。

用途不明品（５・７）のうち、５は両面を丁寧に削った板材から割り取り、割り裂き面上から刀子で幅0.9cm、深さ0.3cmの刻みをつけたもの。木口上端の調整は腐食が著しくて観察できないが、下端は刀子で切断したと思われる。全長8.3cm、厚さ1.0cm。７は、心持ちの丸棒を半裁し、両側から丁寧に削り込んで突起状の部分をつくりだしたもの。半裁した面は削って整えている。糸巻きの横木の可能性がある。残存長5.3cm、幅1.4cm。先端の厚さは0.7cm。

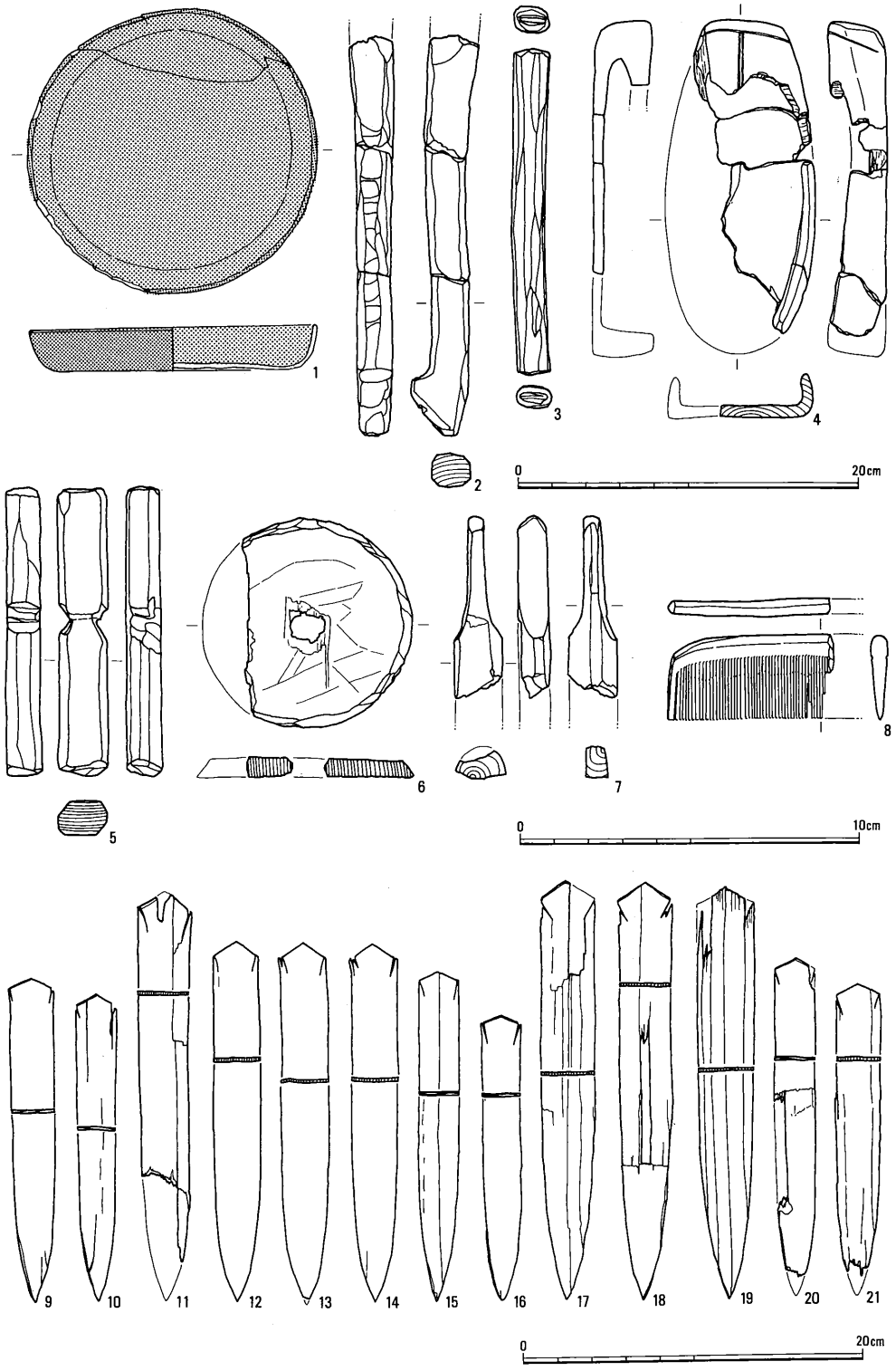
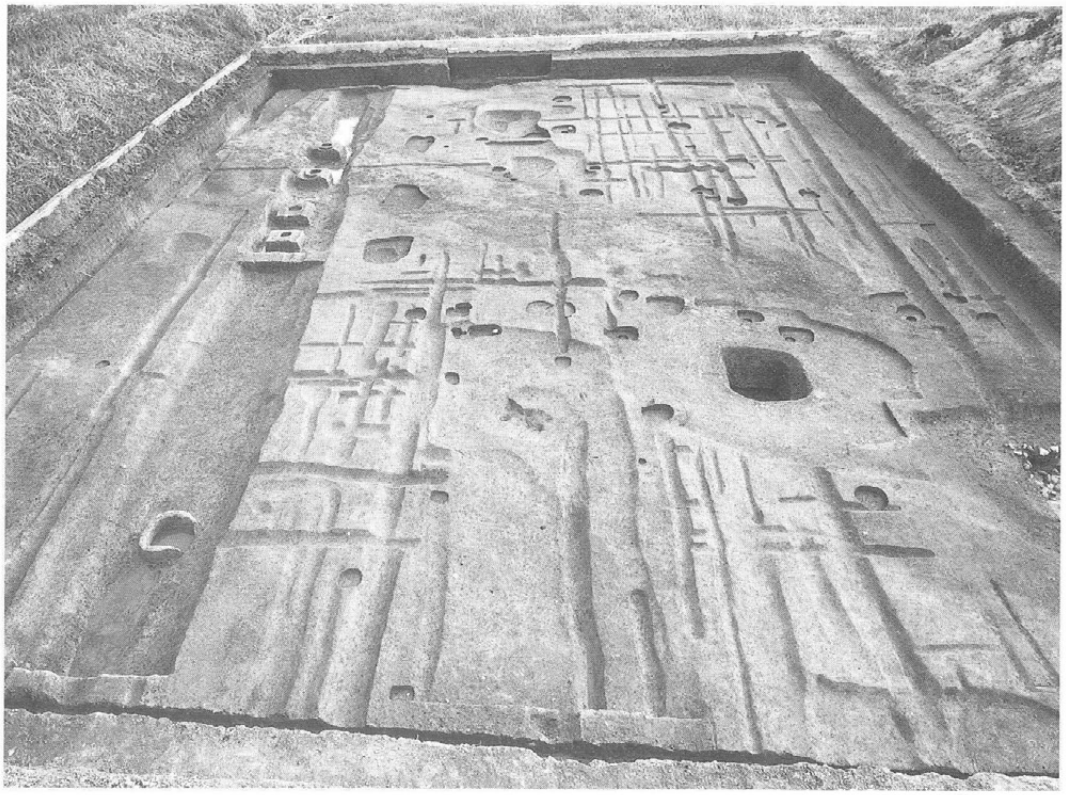
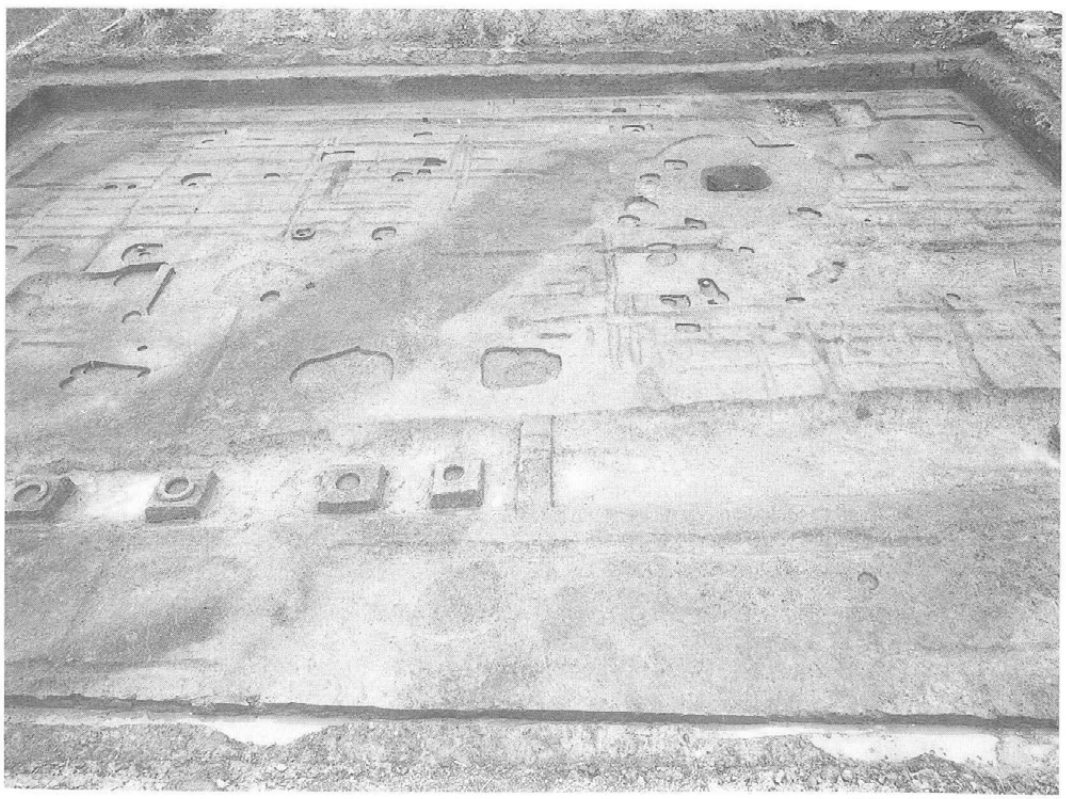


fig. 11　ＳＥ200・201出土木製品　１／４（５～８のみ１／２）



1．発掘区全景（北から）

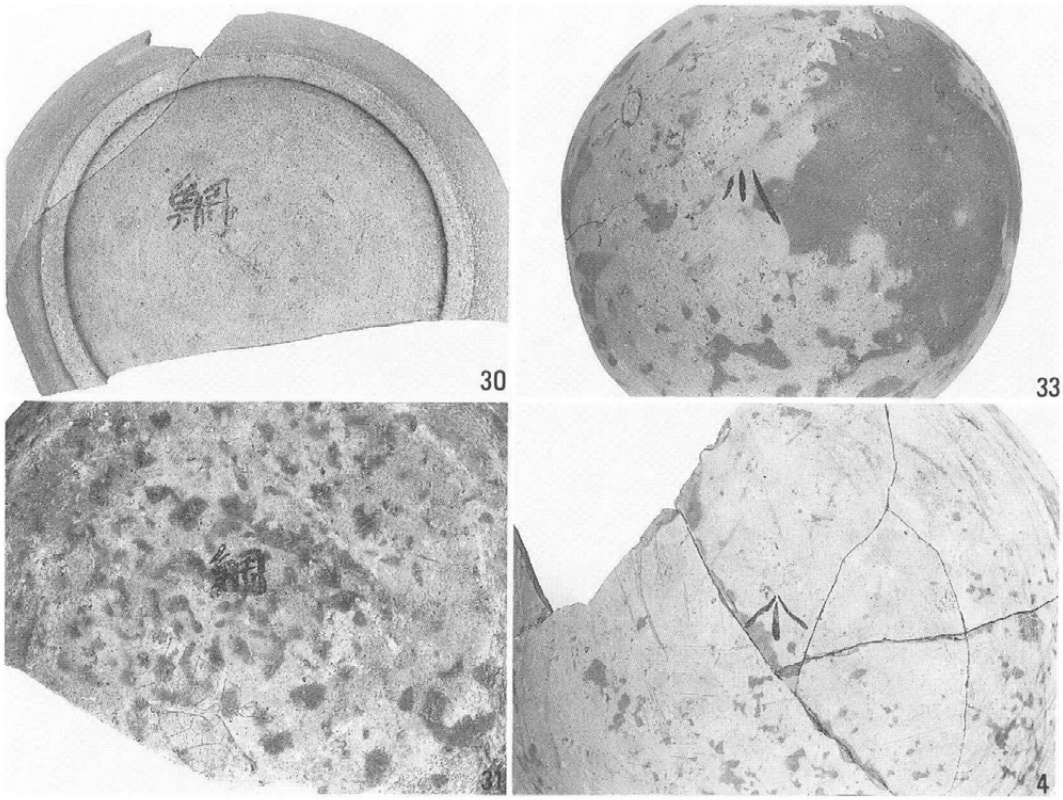


2．発掘区全景（東から）

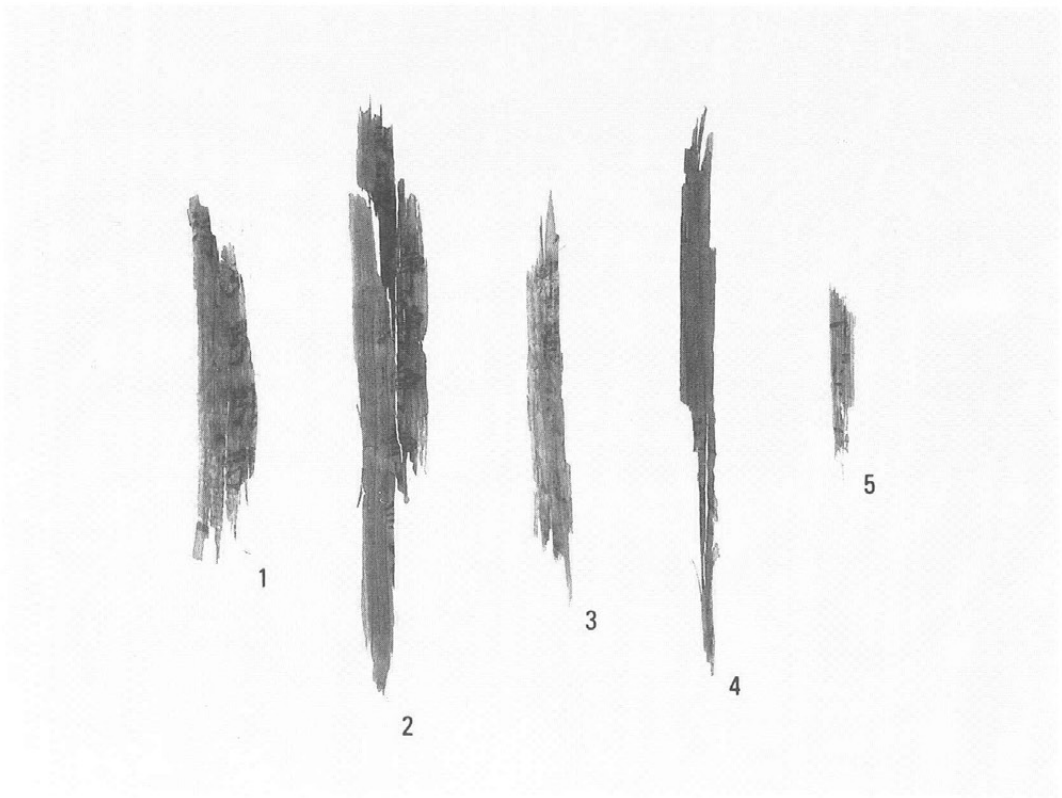
3．ＳＤ028とＳＢ199（南から）

4．ＳＥ200（北から）

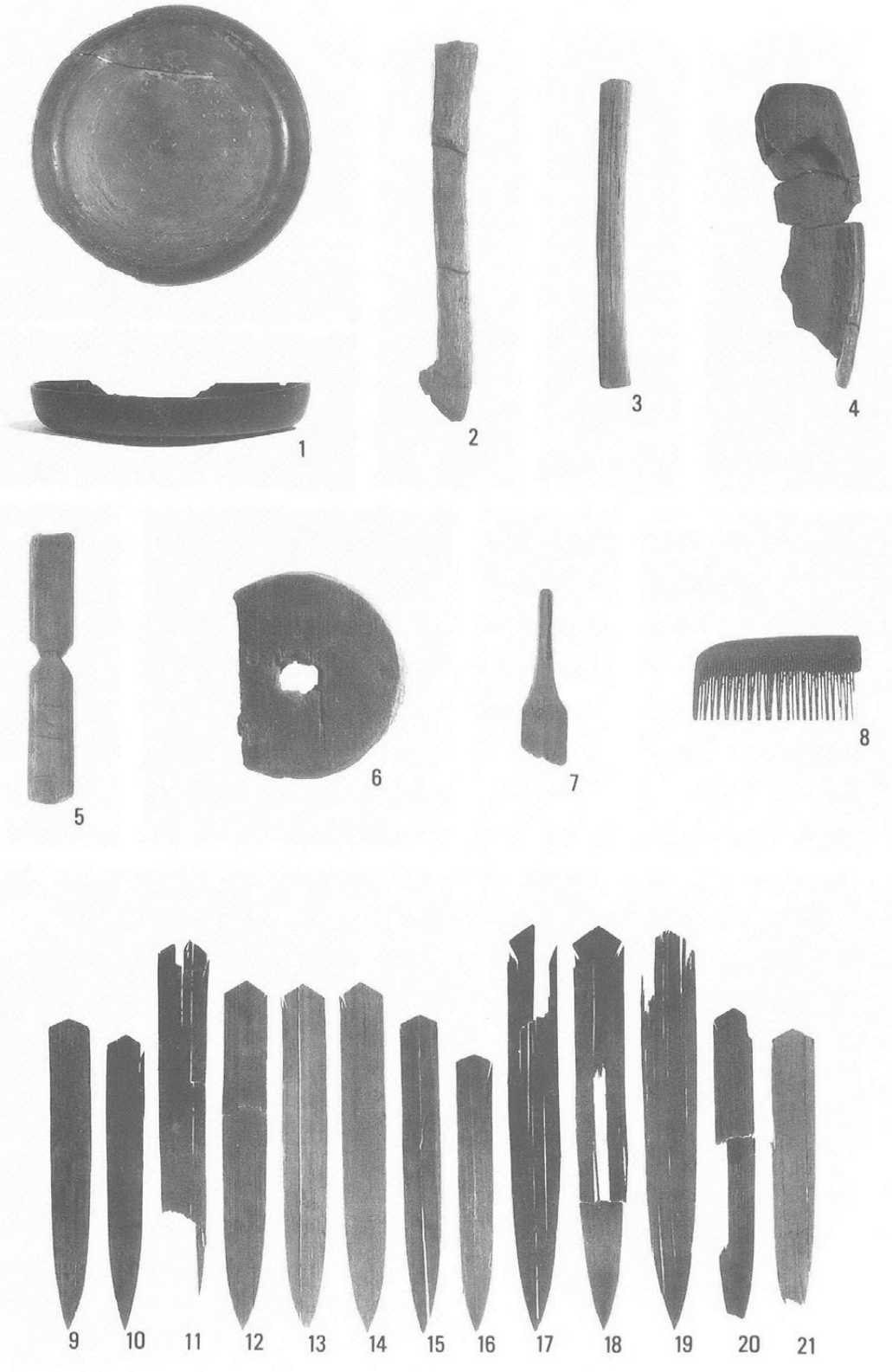
5．ＳＥ201（東から）



6．ＳＥ200出土墨書土器



7．SE200出土木簡



8．ＳＥ200・201出土木製品（1～4，9～21　1／4，5～8　1／2）

Ⅳ ま と め

今回の調査では、門の検出や多量の土器や木製品、文字資料が出土するなどの成果をあげることができた。これまでの調査でも、市域推定地内は従来の一般宅地内の調査成果とは異った様相を呈していることが明らかになってきているが、今回の調査でも同様の成果を得た。以下に、調査成果について簡単にとりまとめておく。

① 築地の添柱痕跡の検出により、六坪の東辺には道路に沿って築地が構築されていたことが明らかになり、市域推定地内は道路でひと坪ごとに区画され、少なくとも六坪の周囲は築地で囲まれていた可能性が高くなった。

② その築地には六坪東辺中央よりもやや北の位置に門が開いていたことが判明した。今後六坪の土地の利用状況を考える上での手がかりとなるであろう。

③ ＳＥ200から多量の土器や木製品とともに墨書土器や木簡などの文字資料が出土したことは、市域推定地の性格を考えるにあたり重要な資料となる。

また、平城京内では出土例の少ない木履や漆器が出土したことにも注目すべきであろう。その出土地は、道路側溝や堀河を除くと平城宮内、長屋王邸、左京八条一坊三坪の池跡といった特殊な遺跡に限られている。

以上述べてきたように、これまでの調査成果は、検出遺構や出土遺物の両面からみても一般宅地内とは異なる事を如実に示しており、この地域は東市跡である可能性がますます高くなってきている。しかし、東市に直接結び付くような決定的な証拠となるにはいたっていない。東市の解明のためには、今後も引続き綿密な調査を行って資料を積み重ね、その全容を明かにしていくことが肝要である。

しかし、東市跡推定地にも開発の波が押し寄せようとしている。現在の状態が続けば、今後、市域推定地も急速に都市化の波にのみこまれるであろう。そのためにも、適切な保存策を早急に講じていく必要がある。

注１） 『埋蔵文化財ニュース　70』「漆製品出土遺跡地名表―西日本編―」奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター　1991

注２） 『平城京長屋王邸宅と木簡』奈良国立文化財研究所編　奈良県教育委員会　1991

注３） 奈良国立文化財研究所史料第27冊『木器集成図録』近畿古代編　奈良国立文化財研究所　1985

平城京東市跡推定地の調査X
第12次発掘調査概報

平成4年3月25日　印刷
平成4年3月30日　発行
編集・発行　奈良市教育委員会
（奈良市二条大路南一丁目1－1）
印　　刷　共同精版印刷株式会社
（奈良市三条大路2丁目2－6）

表　紙　平城京市指図（浄土宗総本山知恩院所蔵『写経所紙筆授受日記』紙背）